

学校読書活動の取組【京丹波町立竹野小学校】

1 実践テーマ

「本との対話による豊かな人間性やコミュニケーション能力の育成」

～家庭や地域との連携を通して～

2 学校及び読書環境の概況

本校は、京都府のほぼ中央に位置する京丹波町にあり、豊かな自然に囲まれた児童数 30 名の小規模校である。地域とともに歩み、学校を核とした地域創生をめざす「ふるさといきいきスクール」推進委員会を設立し、コミュニティ・スクールとしての取組を進めている。読書活動についても、家庭や地域と連携した取組を進めており、平成 29 年度には、「子どもの読書活動優秀実践校 文部科学大臣表彰」を受賞した。



本校の図書室は、地域の方からの寄贈などもあり少しずつ蔵書が増え、今では約 8,000 冊の様々なジャンルの本が揃っている。また、週に 2 回、読書指導員が本の整理、行事や児童の関心に合わせた本の展示、季節に合った図書室の壁面飾りなどを行い、児童が落ち着ける場所となるよう環境を整えている。



3 実践内容

(1) 朝読書

月・火・木・金曜日の朝の 10 分間に、朝読書の時間を設けている。自分が読みたい本を個々に読んで、読み聞かせを楽しんだりしている。職員室の教師も含めて学校全体が本に親しむ時間としている。

(2) 読み聞かせ活動

読書指導員（週 2 回）、図書委員会児童（週 2 回）、地元の読書ボランティア（平成 29 年度は、登録人数 8 名で 延べ 68 人に来校いただいた）が朝読書の時間に各学年で実施している。児童にとっては、読書ボランティアとの交流も楽しみの一つとなっている。



(3) P T A親子読書

P T A人権委員会と連携し、児童の夏季休業中に、読書を通じて心豊かな子どもを育てることをねらいとして実施している。学年ごとに選定した図書を各家庭で回覧し、読書を楽しみながら、親子で人権について考える機会としている。本を読んだ感想は、製本して各家庭に配布し、感想を交流し合えるようにしている。本を通して感想を交流し合うことができる大切な機会としている。

平成 29 年度 P T A親子読書選定図書

- 1年 『おそぎきのレオ』
- 2年 『かっくん～どうしてぼくだけしかくの?～』
- 3年 『ガストン』
- 4年 『わたしはあかねこ』
- 5年 『むねがちくちく』
- 6年 『みずいろのマフラー』



(4) お話会

中秋の名月、クリスマス、節分などの季節に合わせ全校児童対象に実施している。読書指導員・地域の方と連携し、本の読み聞かせを行う。サンタクロースや鬼などに扮装して地域の方が登場することで、児童のお話への興味が高まっている。



(5) 「子ども読書の日」の取組

全校児童対象に「子ども読書の日」に合わせ、教職員のおすすめの本の紹介や読書ボランティアの読み聞かせを行ったり、地域の方を招いて本との関わり方について紹介したりすることにより、本に親しむ大人の姿から、本の楽しさを感じることができる取組にしている。



(6) 竹野サロンでの発表

各学年が年に一回、竹野サロン（住民交流の場としての「高齢者サロン」）で本校の集会で行った発表を「出前発表」として披露している。発表内容は、詩の群読や物語の劇など、学校での読書活動を生かしている。たくさんの地域の方々や保護者、祖父母の前でこれまでの学習の成果を発表する機会にもなり、児童の達成感につながっている。地域の方も「出前発表」を楽しみにしておられ、「出前発表」がある時はサロンへの参加者が倍増するそうである。地域の方にとっても、学校の取組を知ったり、児童の成長を感じたりすることができる貴重な機会になっている。



4 成果と課題

地域の人材を生かしたり、家庭や地域との連携を充実させたりすることにより、学校での読書活動の幅が広がっている。これらの読書活動が、児童が本の楽しさを知るきっかけとなり、自ら本を読もうとする意欲につながっている。個人差はあるものの、学校での様々な読書活動や親子読書を通して、読書の大切さを感じ、家庭でも本に親しんでいる状況にある。

国立青少年教育振興機構の調査によると「読書がコミュニケーション能力の基盤となる」としている。本校は小規模校で各学級の人数も少人数であるため、多人数での関わりや多様な意見に触れるという点で課題がある。児童の豊かな人間性やコミュニケーション能力を育むためにも、今後も、読書活動を教育課程や年間指導計画に適切に位置付け、本校の課題克服に向けた具体的方策のひとつとしていきたい。